



渡辺一夫著作集 14



筑摩書房



渡辺一夫著作集14 補遺 下巻

一九七七年十一月十日 初版第一刷発行

著者 渡辺一夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一七六五二

郵便番号 一〇一一九一

振替 東京六一四二二三

製本 和田製本工業株式会社

印刷 株式会社精興社

©渡辺芳枝一九七七

(分類)1398(製品)74814(出版社)4604

補遺 下巻 目次

A 世間噺・後宮異聞（一九七二年—一九七五年）

はしがき	5
詳細目次	13
序章	21
春の巻	37
夏の巻	98
秋の巻	146
冬の巻	180
終章	222
参考書目	238
略年表	239
索引	286

B 偶感集補遺（一九七〇年—一九七五年）

ほんとうの教育者とは問われて……………

289

数学の功德……………

292

自由の在所は？……………

295

老眼鏡で見たロマン・ロラン……………

298

通ぶつた話……………

一 臆物料理妄談……………

305

二 在バリの若い友人へ……………

307

老耄夢幻記……………

311

魚すき屋の幻……………

314

老耄回顧……………

317

ブリュッゲルとラブレールと私……………

331

巷説 熊・八語録……………

第一話 世の行く末をつくづく……………

336

第二話 ビー・ビー・エム……………

347

第三話 穴居人種……………

358

第四話 フィーリング……………

368

第五話	産学協同粉碎	377
第六話	造反ごっこ	387
第七話	無理が通れば	398
第八話	うらみつらみ	407
第九話	脱・脱・脱	418
第十話	「この人を見よ」	429
『聖アントワヌの誘惑』解説		
聖アントワヌ小伝		441
『聖アントワヌの誘惑』		445
偏見		468
恍惚妄語		471
本との出会い		474
日本語の修業		478
幽幽自擲 ^{ゆうゆうじてき}		483
故水野成夫氏のこと		487
フランス古譚 緑色の妖怪の話		493
自著自装について		498

ノストラダムスの「魔法鏡」の話	501
電気ドリル	505
ラブレーの物語の挿絵について	508
ヴァンセンヌ離宮で行われた「死人の首占い」の話	514
鈴木力衛氏を失って	520
あの面影（『回想の古田見』）	522
妄想一束——ポーシュの「手品師」を眺めつつ——	526
古算笥を眺めながら	530
犬と雀と鯉と猫との話	533
堀田善衛学兄 浄窓下	537
森中森不在	541
C 敗戦日記（一九四五年三月十一日—八月十八日）	549
編者後記（大江健三郎）	601
ひとこと（渡辺芳枝）	i

全卷内容		iii
------	-------	-----

略年譜		xvi
-----	-------	-----

別刷 『世間噺・後宮異聞』 参考地図

Gabrielle d'Estrées en marge de son temps

補遺
下卷

編集

二宮 敬

大江健三郎

A

世間噺・後宮異聞（一九七二年―一九七五年）

―寵姫ガブリエル・デストレをめぐって―

後宮こうきゆう|| 皇后・妃などが住み、女官の奉仕する、宮中奥向きの殿舎。

異聞いぶん|| 常とかわった風聞。珍しい話。

寵姫ちゆうぎ|| 気に入りの侍女。愛妾。

(新村出編『広辞苑』)

はしがき

この『世間噺・後宮異聞』は、フランス十六世紀後半の無慚な宗教戦争の終幕の修羅場にさ迷い出て、時の国王アンリ四世の寵姫となり、王に縋り通したガブリエル・デストレ Gabrielle d'Estrees という一女性の短い生涯と、その哀れな最期とを素描しようとしたものである。

ガブリエル・デストレは、小貴族の出であり、乱脈な家庭の事情も手伝い、十分な教育を受けられなかった上に、少くともアンリ四世に見染められる以前は、下世話で言う「尻軽女」めいたところがあり、王の寵姫となった後は、歴史上の多くの寵姫たちのように国事に容喙して権勢作りに狂奔するということとはなかったが、自らの容色と肉体とによって王を満悦させ、正王妃に擬せられるまでに成りあがった。

従って、ガブリエル・デストレが、その急死後、アンリ四世の離婚された第一王妃マルグリット・ド・フランス(ヴァロワ)(ナヴァール)から、「恥知らずな売春婦」*descrie bagasse* と罵られたこと(本書第五項を参照)にもいたし方ない面もあったのである。(もっとも、この第一王妃マルグリットは、「マルゴ王(公)妃」*La Reine Margot* と呼ばれて、男出入りの絶えなかったその生活が、京童の戯歌にも謡われるほどであったから、ガブリエルを罵倒できる最適格者ではなかったかもしれない。)また、単にマルグリット妃のみならず、或る時期からは、パリ市民たちが、ガブリエルを「売女」*putain* 呼ばわりするようになった(本書第三項及び第五項以下を参照)こ

とも、これまたいたし方なかったかもしれない。

更にまた、現代の史家ルイ・レーモン・ルフェーヴル Louis-Raymond Lefevre が、ガブリエルを評して、「お引摺り・ぐにゃぐにゃ女」*une mollesse*と呼んでいる（本書第二項を参照）のも、我が国のフランス文学研究家として高名な某女史が、同じくガブリエルを「あんな女」と呼んで居られるのも、これまたいたし方ないのかもしれないと思う。

このような評価を受けているガブリエル・デストレに、老書生の私が関心を抱いたのは、いくつかのその肖像画に宿っている婀娜姿の幻に現を抜かしたためでは決してない。むしろ、「怠義冥分」「類義迷分」を大義名分と思ひ違え、我慾に正義の仮面をかぶせ、同じキリスト教徒同士が、同じキリストの名を唱えつつ憎み合い殺し合っている惨澹たる舞台へ突然現れ出て間もなく消え去った一女性のはかない幻の残像のあわれさのためだったと言ってもよい。そして、これは一片の感傷だけに止まらず、ガブリエル・デストレの幻は、動乱の折にはかく消えてゆく数限りもない人間の幻の一つだったということをも今更のように悟らせるのである。

ガブリエル・デストレが私の気にかかっていたもう一つの理由が別にあった。それは次のようなことである。

アンリ四世の女性関係は甚だ多彩であるが、第一王妃（マルグリット「マルゴ」）や第二王妃（マリ・ド・メデイチ）を別格とすれば、王の所謂「一夜妻」と呼ばれてもよい多くの女性たちや、王の愛妾・寵姫と呼ばれてしかるべき数人の女性のうち、小さな人名辞典（例えば『小ラルウス辞典』）中にその名を止めているのは、ガブリエル・デストレとアンリエット・ダントラーグ（ヴェルヌイ女侯爵）（本書第八項以下を参照）との二人にすぎない。しかも、アンリエットはガブリエル歿後に現れた寵姫であるから、ガブリエルは、ガブリエル以前に王の寵愛を受けた多くの女性の影を薄くする存在として取扱われていると言ってもよからう。尚、岩波書店刊の『西洋人名辞典』には、ガブリエルの名は出ているが、アンリエットの名は見当らないことをも附言する。

「人名辞典」に名が出てゐる出ていないによって、その人物の価値が極められるものとは思われないが、「恥知らずな売春婦」「お引摺り」「あんな女」と呼ばれてゐるガブリエルが、なぜこのように後世の「人名辞典」では「好遇」されるのであろうか？ それには、それだけの理由があるに違いないし、それを全部明らかにすることは私に許されないとしても、その幾分かを具体的に「想像」してみたいと思う氣持が、ガブリエル・デストレに対する私の関心を更に唆つたのである。

しかし第一に当惑させられたことは、ガブリエル・デストレは、その受けた教養の薄さの故か文筆に長じなかつたらしく、寡聞な私の独断を恐れずに申せば、彼女の手になる文章類はあまり伝わっていないようである。例えばアンリ四世の母ジャンヌ・ダルブレ Jeanne d'Albret (1528-1572) や第一王妃のマルグリット (マルゴ) のように、史料としての価値もあり、作者の心情をかなりの程度に窺わせてくれる『思い出の記』Mémoires の類は、ガブリエル・デストレによつて綴られる術もなかつたことはほぼ確実であるし、彼女によつて書かれた書簡もさほど遺されていないようである。フランスでも、今後よほど奇特な人が出現しない限り、彼女の手になった文書類の発掘活字化は行われないと予想されるし、遠く離れた日本列島にいては、辛うじて手にした彼女の筆跡写真を眺めて、徒らにもどかしい思いをするばかりである。申すまでもなく、『思い出の記』の類や書簡にも、当人の生なまな声を伝える限度はある筈だろうが、何も書き残されていない場合よりも、何か書き残されている場合のほうが、何らかの手がかりを与えてくれることは確かである。その点ガブリエル・デストレは、曖昧な輪郭しか見せない白抜き印刷の肖像のような感じである。

結局のところ、ガブリエルについて書かれた稗史的雜書や、彼女と深いかかわりのあるアンリ四世の色々な伝記類や、当時の人々の残した若干の『日記』類のなかから、彼女の白抜き印刷の肖像の眼鼻立ちになり得ると思われるものを拾ひ集めるより外に仕方がなかつたのである。

ガブリエル・デストレが、もし王の寵姫などにはならず、身分相応な小貴族に嫁いでいたならば、『小ラルウー
ス辞典』にその名が残されることには恐らくならなかったとしても、王の寵愛を一身に鍾めて正王妃候補者になり
ながらも、一部の人々の怨恨嫉妬の的となったり、正王妃冊立に関して王の「忠臣」たちの反対に会ったりして、
はては、毒殺という噂に包まれた急死を遂げるようなことにもならなかったかもしれない。その間、絶対王権確立
期にも見られた厳しい社会階層制度に縛られ、無情な政略結婚の慣習の圧力に弾き飛ばされた一人の平凡な女性の
うめき声が聞えてくるような気がするし、そのうめき声には、絶対王権確立の緒を握りつつ、政略結婚の締木に挟
まれざるを得なかった王自身の深い吐息が混っているように思われるのである。

本書は、六章に分けられているが、「序章」では、ヴァロワ王朝の最後の王アンリ三世の横死によって、王位継
承権を得たブルボン家のアンリ・ド・ナヴァール（ベアルヌ）が、新教徒軍の総帥として刻々と勢力を増し、荒
れ狂った宗教戦争に終止符を打つために、敢て旧教に改宗して正式に国王アンリ四世となり、国内統一を計るまで
の大凡の政治的背景を点描したつもりである。「序章」中で触れた事項中、それに続く章中で再び取扱われるもの
もあるが、概説的な「序章」の性質上やむを得ない。

「春の巻」と題する章では、エストレ家のこと、ガブリエルの母やその実家ラ・ブルデジュール家のこと、ガブ
リエルの兄弟姉妹縁者のことが述べられ、アンリ四世王がガブリエルを見染めた時から、王が改宗して王位に登り、
バリへ無血入城するまでのことなどが略記される。

「夏の巻」では、「ナントの勅令」発布にいたるまでのアンリ四世の国内平定の努力と併行して、ガブリエルの寵
姫としての地位が固まって行く経過が述べられる。

「秋の巻」では、アンリ四世の国内統一が、ほぼ完成しかけた時、不平分子の反アンリ四世運動が一部の人々の反ガブリエル運動と合流して不穏な空気が生れたにも拘らず、アンリ四世は、これを押し切って、ガブリエルを新王妃にする決意を固めたことが述べられる。

「冬の巻」は、ガブリエルが急死した事情や、この死に関して様々な噂や憶測が生れたことに触れる。

「終章」では、ガブリエルの死後、アンリ四世がマリ・ド・メディチを新王妃として迎えながらも、数々の女性と関係したことや、第一王妃マルグリット（マルゴ）の消息などについて、附帯事項に触れた。

○

私は、過去の人間の姿を省みながら現在の人間の在方を考えるのが好きであるから、所謂史書に親しむことが多い。しかし専門家の方々が問題にされる史観・史眼なるものは持ち合わせていないために、単なる好事家の域に低迷せざるを得なくなっている。私がガブリエル・デストレに関心を持った理由は、既に述べた通りであるが、結局は、単なる好事家としてこの女性のことを若干調べただけである。正面からガブリエル・デストレ伝乃至研究とすることは、私の任ではない。いずれ本格的な学者の方々が、更に豊富な資料を駆使し、私の持ち合わせない歴史観文化観の上に立った「ガブリエル・デストレ正伝・研究」を綴られることを期待している。

このような好事家的な調査でも、少くとも当人の私には、フランス十六世紀後半の文化・社会の諸現象（例えばミシエル・ド・モンテーニュの存在など）を、正面からではなしに、モンテーニュ流に言えば *de biais*（斜め）に少しばかり覗き見させてくれたことはありがたかったと思っている。何事であれ正面から本格的に対象に取組む力量に乏しい私には、学者の方々からはとかく軽視され勝ちになるかもしれないような傍系的事項を突っついてみるのが分相応だという気もしている。